

株式会社クラレ「2025 年度決算説明会」質疑応答要旨

日 時 2026 年 2 月 10 日（火） 15:00～16:00
場 所 クラレ本社 21 階 大ホール ※会場と配信のハイブリッドにて実施
出席者 代表取締役社長 川原 仁
常務執行役員 経営企画室担当 藤原 純一
IR・広報部長 滝沢 慎一

1. 主要製品の数量伸長率

	24 年度通期実績 →25 年度通期実績	25 年通期実績 →26 年通期見通し
ポパール樹脂	約▲10%	+10%弱
光学用ポパールフィルム	+5%弱	横ばい
高機能中間膜	▲5%強	+5%強
水溶性ポパールフィルム	若干プラス	若干プラス
〈エバール〉	+5%弱	+10%弱
エラストマー	+5%弱	+15%弱
〈ジェネスタ〉	+15%強	約+20%
活性炭	+5%強	+5%弱
ビニロン	横ばい	若干プラス

2. 質疑応答

- Q. イソプレンセグメントでの減損損失の計上について
- A. タイプラントの投資決定時に前提としていた市場環境等が構造的に変化してきた。エラストマーは、アジアの競合メーカーが積極的に生産能力を増強した結果、世界的に供給過剰の状態が続いている。イソプレンケミカルに関しては、ターゲットの一つとしていた中国建築市場の低迷が長期化することが見込まれる。これらの変化を踏まえて将来キャッシュフローを見積り直した結果、25 年度に減損損失を計上することとなった。
- イソプレンセグメントとしては、強みを持つ〈ジェネスタ〉を伸ばす、エラストマーは顧客ごとにカスタマイズした高付加価値品を拡販する、イソプレンケミカルはタイで生産するモノマーを鹿島で誘導品に加工し販売するといった施策により、収益性を向上させる。
- また、25 年 9 月にタイ合弁事業の出資比率を引き上げた。これにより、生産・販売計画や試作等をスピーディーに決定、実行できるようになった。オペレーションの最適化により在庫や物流コストも削減できると考えており、早期に効果を発現させる。
- なお、減損による減価償却費の減少額は年間 30 億円程度である。

- Q. 25 年 3Q から 4Q にかけての営業利益増減要因について
- A. ビニルアセテートセグメントは 47 億円の減益となった。4Q での需要回復や在庫評価差額、販売構成等により光学用ポバールフィルム、エバールが増益となった一方で、定修段差や数量減によりポバール樹脂や高機能中間膜が減益となった。
- イソプレンセグメントは 18 億円の減益となった。数量は全てのサブセグメントで増加したが、2Q に実施した定修による在庫評価差額のマイナス影響などがあった。
- 機能材料セグメントは 11 億円の増益となった。メディカルが季節因やマーケティング・法規制対応費用の増加により減益となった一方で、活性炭が販売構成等により増益となった。
- 繊維セグメントの利益は横ばいだった。
- Q. ビニルアセテートセグメントの 26 年度業績予想の背景について
- A. ポバール樹脂及び高機能中間膜は、上期に数量が伸び、下期は横ばい又は若干マイナス程度と見ている。なお、高機能中間膜の〈セントリグラス〉は、その性能が高く評価されており、26 年度も大きな数量の伸びを想定している。光学用ポバールフィルム及び水溶性ポバールフィルムは、25 年 4Q の出荷が想定より増えたことなどから、26 年上期は調整により数量は増えず、下期にかけて数量が伸びると見ている。エバールについては、年を通じて徐々に数量が増える想定である。サーキュラーエコノミー関連需要は景気低迷を受けてやや遅れが見られるが、欧州での 30 年のリサイクル可能包材への変更義務化は変わっておらず、今後確実に需要が増加すると考えている。
- Q. 活性炭の 26 年度業績予想の背景について
- A. 飲料水用途を中心に需要の拡大は続いている。一方で、昨年に引き続き今年も、米国での関税政策等による消費の冷え込み、設備投資の延期といった影響は残ると考えており、上期から大きく数量が伸びる前提とはしていない。飲料水用途に関しては、26 年から米国 PFAS 規制強化の効果が出てくると考えているが、まだ割合はそれほど大きくなく、通年としては 5%程度の数量伸長を想定している。

注意事項

本資料は、説明会でお話したこと全てをそのまま書き起こしたのではなく、理解しやすいように当社の判断で簡潔にまとめたものであることをご了承ください。

また、本資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、当社が現在入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいており、実際の業績等は様々な要因により大きく異なる可能性 があることをご了承ください。

以上